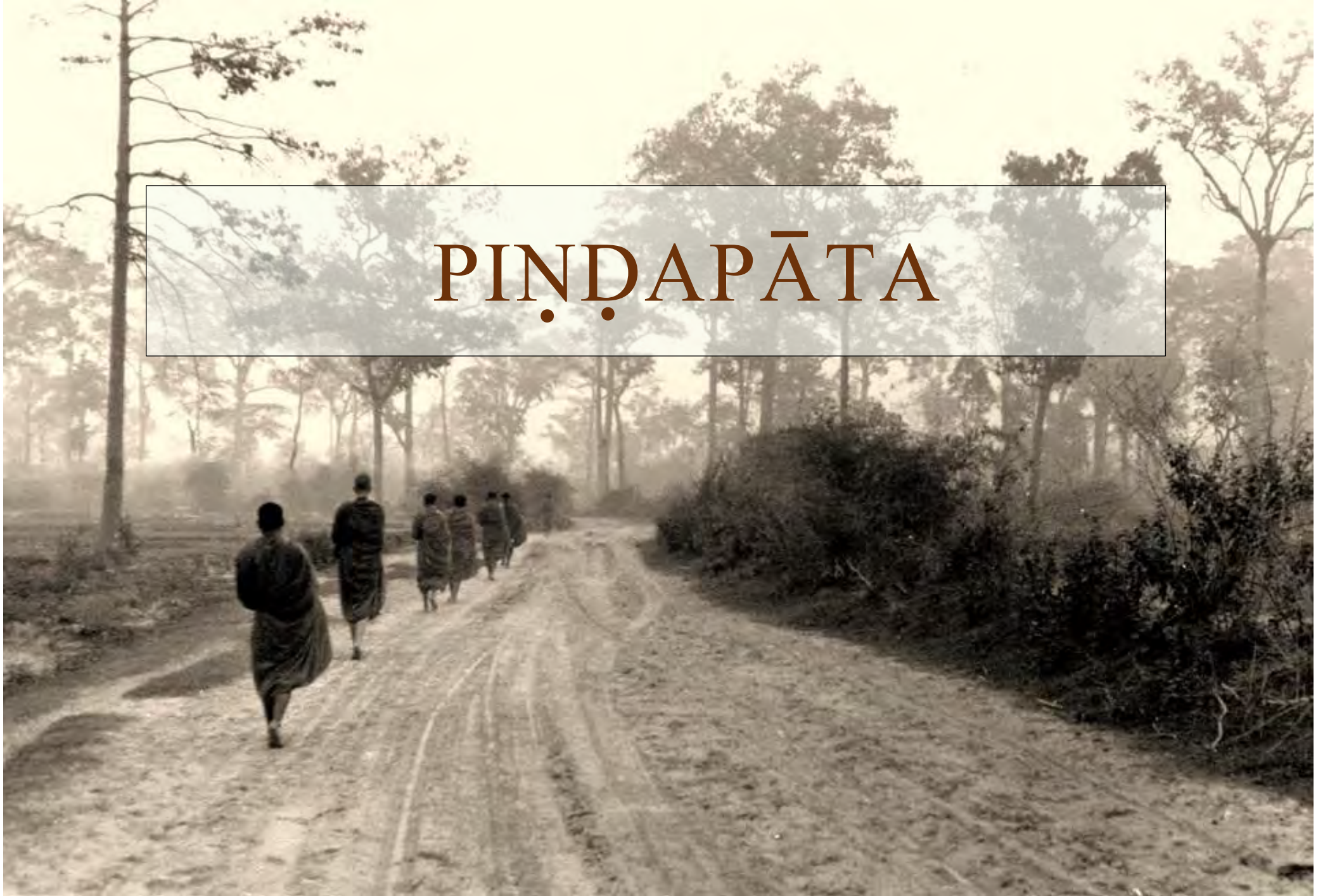


PINḌAPĀTA



托鉢/ Piṇḍapāta

比丘や沙弥によって行われる毎日の托鉢は、比丘サンガと在家の人々を結びつけるという目的を持つ営みでもあり、与える者と受ける者の間に成立する信頼関係を表徴するものとなる。

そのような、仏教にとって理想的な様相をもつ比丘達の托鉢行と布施者の美德ある行いは、テーラワーダ仏教諸国にあっては顕著に見られるもので、布施者にとっての「乞う者」、すなわち比丘は福田 (puññakhetta — 福德の増すところ) となる最良の者たちのことであり、仏陀によって説かれ定められた「法」と「律」に正しく従って修行実践を重ねている者、との認識を生じさせるのである。

その比丘や沙弥の命を保ち、日々の修行生活を支える食物が托鉢によって得たものに依っていることで、托鉢行は仏教の存続においても大変重要な事柄であるといわれている。

仏陀は、比丘が自らの生活を維持するために何らかの職業をもつことも、農産物を生産することも禁じている。また、自ら料理することも認められず、誰かに献上されたものでなければ、たとえ地面に落ちている果物さえも拾い上げるべきではない、と定められている。

その様な理由からも、托鉢行は沙門 (samaṇa — 出家修行者) にとって必須の営みとなっているのであり、仏法に生きる清浄なる日々を支える修行の徳目となるのである。

Mahachulalongkornrajavidyalaya University 発行

“Alms-gathering and Ethical Value in Theravada Buddhism” p.30

訳 Phra Mahāpunnyō

